



浜名湖ロマン十景

遥かなる歴史ロマンを求めて！



NPO 法人 浜名湖クラブ

浜名湖ロマン十景

浜名湖は、古来多くの人々の往来があり、特にいにしえの情景は歌としても残されている風光明媚な土地柄である。また不思議な事でもあるが、浜名湖周辺からは歴史的な偉人や世界企業が、集中的に生まれ育つ土地柄でもある。

これらの事柄は、浜名湖周辺の歴史的な積み重ねが大きいと思われるが、今となっては、その真意を知ることは出来ない。唯、歴史的に見ると、縄文時代から三遠南信はもとより、日本の内陸深くからも人々の交流があり、海洋に於いても、遠く太平洋の島々と交流してきた事が影響しているようである。

特に古代浜名湖に於いては、遺跡や伝承等により現代人が想像する以上に、頻繁に船を活用した人々の交流があったことが伺える。

そうした人々の交流により、日本国の形成時に大きく寄与するような歴史的なドラマが、時に激しく、時に優しく、この浜名湖に於いて繰り広げられていたようである。まさに真実に近づきたいと思う浜名湖ロマンの世界である。

この度、浜名湖ロマンに共感された方々から、浜名湖周辺を興味深く訪問できる場所のお尋ねがあり、浜名湖ロマンの視点で、変わりゆく自然景観に思いを馳せると同時に、古代の人々の感性に触れる良き機会として浜名湖ロマン十景を考えてみた。

〔浜名湖ロマン十景は次の通りである〕

：新居浜と浜名橋。

：白須賀と浜名川。

：江尻鼻と瞳水面。

：嵩山とトキワマンサク。

：瀬戸と猪鼻湖神社。

：浜名神戸と浜名惣社神名宮。

：細江神社と潯標。(みおつくし)

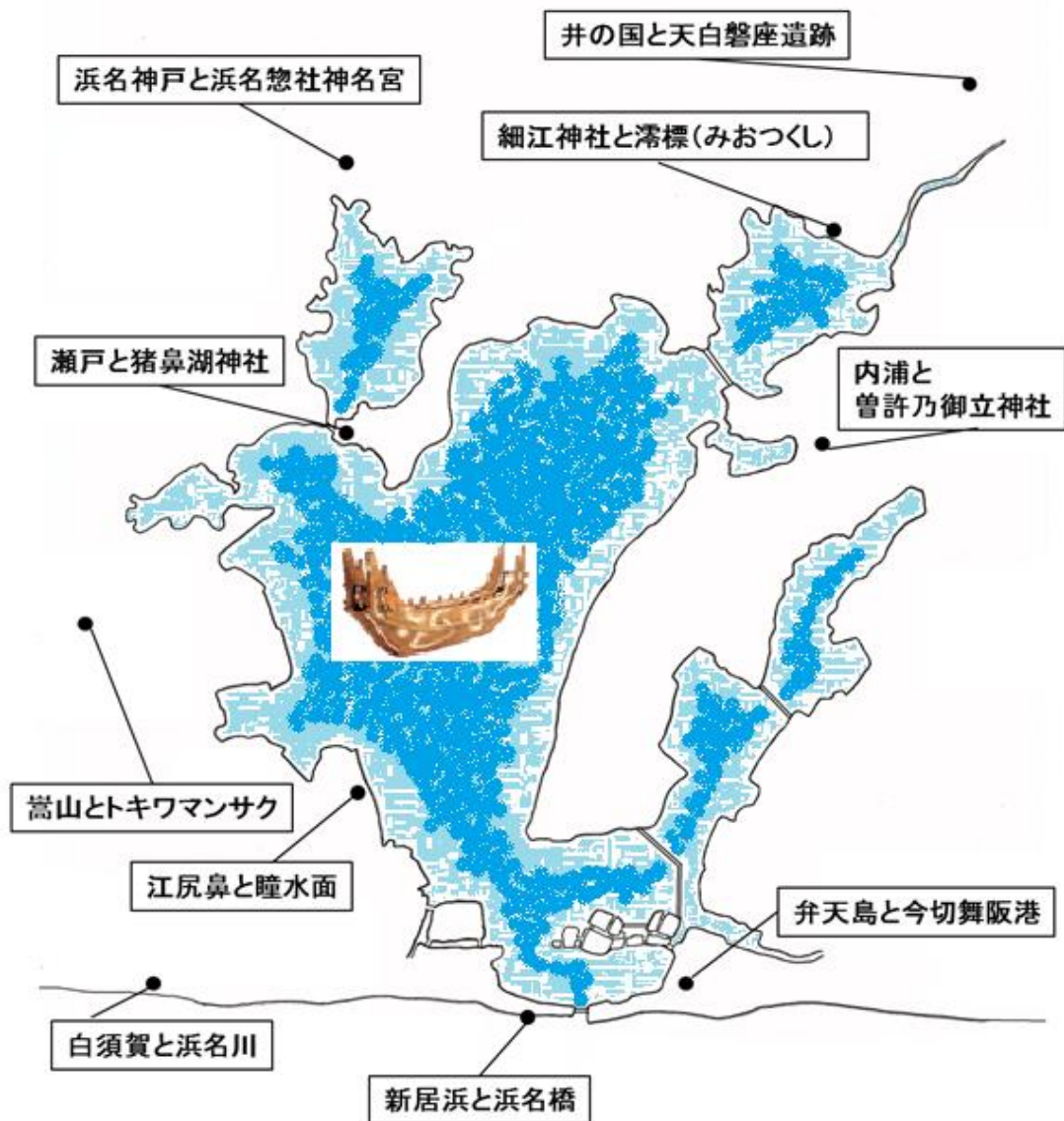
：井の国と天白磐座遺跡。

：内浦と曾許乃御立神社。

：弁天島と今切舞阪港。

以上。

浜名湖ロマン十景



古代、浜名湖畔では朝夕に多数の船が見られたと思われる。その中には政治、経済、文化に関わる外来船もあり、周辺に大きな影響を与えたと考えられる。

浜名湖ロマンの十景巡りにあたっては、船を使って当時に思いを馳せる事で、新たな発見があるかもしれない。

：新居浜と浜名橋。

古代から中世にかけて、浜名湖南部の新居浜近くには、東西を往来する為の浜名橋が架かっていたという。しかし、今もその場所が何処であったか特定されていない。同じように、その往来時に参拝されたと言われる、角避比古神社も現在、何処にあったか特定されていない。

唯、この角避比古神社も伊勢神宮、鹿島神宮、出雲大社等と同じように、古代、海辺近くに造られた神社であったと伝承されている。

角避比古神社は明応 7 年（1498 年＝室町時代）、天変地異により所在が分からなくなったとされているが、現在、浜名湖畔にある湊神社、細江神社、猪鼻湖神社のほか、周辺の神社の多くがその流れを汲むというほど、格式の高かった神社のようである。

角避比古の神はどのような方だったか、文献上にはその存在が殆ど残されていないが天変地異により、神社は浜名湖（まなこ＝眼）一円に広がり、さらに大きな力を生み出しているようである。

現在、日本最大のパワースポットといわれる浜名湖に於いて、古来、東西を行き来した人達に親しまれ、歌に詠まれた浜名橋や角避比古神社は、何処にあったのか、新居浜周辺を探訪し、時空を超えた推理に挑むのはどうだろうか。

〔所在地周辺〕

〒431-0302 静岡県湖西市新居町新居 （新居海釣り公園周辺）
053-594-6624 （海湖館）

〔周辺の観光施設〕・新居の関所・今切口・海湖館

（現在、今切口に架かる浜名大橋）



（南端にある新居弁天海浜公園）



：白須賀と浜名川。

明応 7 年（1498 年）の大地震以前の浜名湖は、現在の今切口は無く、浜名湖南部の白須賀近くを流れる浜名川により、太平洋に注いでいた。

古来、太平洋は徐福伝説を含め多くの海人（海神）が黒潮に乗り、夢ある地を探し求め、沿岸に上陸したようである。日本の古くからある大きな神社の殆どが水辺にあるのは、こうした事からかもしれない。

古代の浜名湖にも多くの神々の足跡があり、海流に乗りこの白須賀の地に上陸し、浜名川を多くの人がロープで船を引きながら遡上し、湖内に入って行ったと思われる。こうした船の扱い方は、世界の開拓史にも良く見られる光景である。

白須賀の潮見坂から太平洋を見下ろす時、いにしえの時代に新天地を目指し、力強く活動する清々しさを自然とを感じる事ができる。そしてこの場に居ると、何かしらの活力や幸運が体にまつわり付くような気がする所でもある。

是非、感じて見てはどうだろうか。

因みにこの白須賀は、後に天下をとる徳川家康に運が舞い降りた所でもある。（白須賀の密談：（概略） 天下分け目の戦は関ヶ原であるが、勝敗を決したのは小早川秀秋の裏切りが極めて大きいと、史実では言われている。当時、この裏切りについて、小早川秀秋の家老が西国からこの白須賀まで来て、家康と面談して確約したと言われている。当時の家康は、天下まで獲るとは考えていなかったと言われ、まさに運を掴んだ地である。）

〔所在地周辺〕

〒431-0451 静岡県湖西市白須賀 900 （おんやど白須賀）

静岡県湖西市新居町新居（現新居町～大倉戸周辺＝浜名川）

〔周辺の観光施設〕・おんやど白須賀・潮見坂・白須賀（旧東海道）

（資料館・おんやど白須賀）



（現在の浜名川）



：江尻鼻と瞳水面。

浜名湖は眼（まなこ）であり、その瞳は水面として江尻鼻や女河浦の湖畔から見る事ができる。江尻鼻の湖岸に立つと、見渡す限りの広い水面に瞳を妨げるものは無く、清々しく見通すことができる。

また、この場所からは今切口に架かる浜名大橋、東名高速道路の浜名湖橋、更に瀬戸に架かる新瀬戸橋の“浜名三橋”を見る事ができる。

そして、前に見える広い水面では、浜名湖で操業する小型漁船の活動風景が手に取るように見える。

この雄大な水面を前にして、瞳を閉じながら瞑想すると、些細なことに気を病むことは消え、新鮮な心持になれる。

そして大きく深呼吸をして、瞳水面の大気を体の中に取り入れて見ては如何だろうか。すぐにでも時代の先を見通す力が宿るかもしれない。

因みに、江尻鼻から水面を見た先の村櫛を越えた対岸の地名は、瞳（ひとみ）の語源でもある“人見”である。その湖畔の地は古くから人見（ひとみ）と呼ばれ、現在は瞳ヶ丘団地や瞳ヶ丘保育園がある。実に不思議である。

〔所在地周辺〕

〒431-0431 静岡県湖西市鷺津 2867-5

（江尻鼻＝表鷺津湖岸 1 号公園）

〔周辺の観光施設〕・本興寺・豊田佐吉記念館

（江尻鼻緑地公園）



（浜名湖の瞳が広がる水面）



：嵩山とトキワマンサク。

浜名湖畔の西側の湖西市に、嵩山（すやま）という美しい三角形をした山がある。この山頂からも浜名湖が瞳として輝く姿が見える。この麓の地名は神座（かんざ）と言ひ、古代この山を崇拝した証として、中腹に神座古墳群がある。

この麓の神座には日本には三ヶ所しかないトキワマンサクの群生地がある。神座はその北限である。この三ヶ所というのは神座と伊勢神宮と熊本県の小岱山であり、いずれも古代から神々の宿る場所として知られていると同時に、それぞれ海辺に近い所にある。

前述したが不思議にも、日本の古くからの神社の多くは海辺（水辺）の近くに建てられている。これらは何を意味するのだろうか。

一つの大膽な仮説であるが、トキワマンサクは台湾、中国南部、インドなど南方に分布する樹木であり、トキワマンサクの花は、緑の葉の中に白紙を束ねたような花が咲き、いかにも神事に用いる紙垂（現在は白紙であるが以前は木綿であった。）の原型のように思えてならない。

このトキワマンサクは単なる群生地ではなく、日本形成時に神聖なる植物と崇め、信仰する人々が渡来して、聖地と考えられるこの三ヶ所に植樹をしたのではないかと思われる。

（似た実証例があると聞く。＝古代、宗像三神を崇拝する人々は、日本海側の聖なる地に椿を北限の秋田まで植樹していった例がある。）

日本の形成時には、浜名湖や特に神座が聖なる地であったと考ええると、興味が尽きない。嵩山頂上より水面に映り迫る日の出を見る事は、神聖な気持ちを得るようだ。現在、トキワマンサクの木だけがその事実を知っているのである。

〔所在地周辺〕〒431-0405 静岡県湖西市梅田 160（登山口＝梅田親水公園）

静岡県湖西市神座 239 （トキワマンサクの里）

〔周辺の観光施設〕・摩利支天・湖西連峰

（浜名湖方面から見た嵩山。中腹に神座古墳群がある。）（トキワマンサク）



：瀬戸と猪鼻湖神社。

猪鼻湖は浜名湖の北側に位置し、西から北にかけ山が連なり一年中緑の木々に囲まれ、湖面は比較的穏やかで風光明媚な北の湖である。

古くから山側には神社仏閣が建てられ、猪鼻湖の北には山側の東海道として本坂街道（姫街道）が通っている。この本坂街道の名の由来は、猪鼻湖の北側から豊橋に向かう坂道の事で、豊橋は古代“ほの国”と呼ばれ、“ほ”の坂の道から、本坂街道と呼ばれるようになったという説が強い。

因みに“ほの国”の“ほ”は、大和言葉で顔の頬（ほ）と同じ意味であり、浜名湖ロマンで説明している人物像の頬と同じ位置に豊橋があり、古代の人達が人物像の顔の位置を認識して“ほの国”と名付けたと考えると納得しやすい。

更に時代を遡ると“ほ”ではなく“ほお”（寶飫郡＝ほおぐん）と呼ばれていたことが判明した。実に驚きである。

瀬戸は浜名湖から猪鼻湖に入る比較的狭い水路であり、その為に猪鼻湖は独立した山間の湖のように見える。この瀬戸に古くから猪鼻湖神社が鎮座されており、社に向かうには水際を歩くことになるが、その為に独特の参拝気分を感じる事ができる。猪鼻湖神社は大きな社はないものの、緑の木々と赤い橋が湖面全体と調和して大変美しい。

橋の前では湖であるにもかかわらず潮のにおいが漂い、立ち止まって周囲を見渡すと心落ち着く不思議な場所である。

〔所在地周辺〕

〒431-1403 静岡県浜松市北区三ヶ日町大崎 1899－5（瀬戸港）

静岡県浜松市北区三ヶ日町大崎 （猪鼻湖神社）

〔周辺の観光施設〕・姫街道三ヶ日宿本陣跡・乎那の峯

（瀬戸の猪鼻子神社）



（奥浜名湖＝猪鼻湖）



：浜名神戸と浜名惣社神明宮。

古代、三ヶ日地域は浜名神戸と呼ばれ伊勢神宮領であった。浜名湖畔近くにある神社の社は概ね浜名湖の方向を向いている。しかし浜名惣社神明宮は別の方向を向いている。それは伊勢神宮である。

船の信頼性が極めて低いと思われる時代に、伊勢神宮では対岸にある渥美半島中央の田原市に田原神戸、そして浜名湖畔に浜名神戸を逸早く領していた。

本来、領地を広げようとするれば、伊勢神宮に近接した所に造るものであり、まして古代に海を渡る遠方の地に、逸早く造った意味は何だったのだろうか。

伊勢神宮はアマテラス大御神を祭る太陽神といわれている。当時、太陽は生活を営む為の全てであり、とりわけ日の出は最も重要な事柄だったと思う。

眼である浜名湖方面は伊勢神宮にとっての日の出の地であり、当時の人には浜名湖を眼とした人物の地形が理解できたと考えられ、重要視したと思う。

日の出という眼から発する光を求め、田原や浜名湖に神戸を領したのは当然の事だったのかもしれない。

いずれにしても浜名湖から渥美半島（中央に田原神戸）を通り、伊勢神宮までの光の道は、古代人にとって神聖であり、大きな意味を持っていたのかもしれない。まさに浜名湖ロマンであり、魅力的な謎解きである。

川隣りに鎮座する遠州織物の発祥地である初生衣神社も、伊勢神宮との関係が深い古社である。毎年、御衣（おんぞ）を伊勢神宮に奉納する神社でもある。

〔所在地周辺〕

〒431-1414 静岡県浜松市北区三ヶ日町三ヶ日 122

（浜名惣社神明宮 053-524-0833 浜名神戸＝三ヶ日周辺）

〔周辺の観光施設〕・みかんの里資料館・摩訶耶寺・大福寺

（初生衣神社）



（浜名惣社神明宮）



：細江神社と漣標。(みおつくし)

古代、東海道の旅人が浜名湖の往来時に参拝したという格式の高い角避比古神社は 1498 年、天変地異により神社の形が崩れ、浜名湖一円に分散し、最終地として気賀の赤池に漂着し、その御神体を祀ったのが細江神社と言われている。

この出来事により細江神社を初め、広く浜名湖一円に形を変えた新しい力として生まれ変わり、時空を超えた影響力を発揮するに至ったようである。

細江神社の参拝後に清々しい気持ちになるのはそのせいかもしれない。

細江神社のある引佐細江の都田川流域は、古代最も神聖な地域として栄えたことが伺える。その証として陸上では、日本有数の銅鐸の出土地であり、また多くの古墳が見られる所である。そして水上に於いては 1300 年前から都田川河口に、漣標が設置されていた事で理解できる。

漣標は浅瀬を知らせるものであり、その水域の状況を知らない船乗りに警告する為のものである。そうした事から察すると、この地には遠方より多くの船が出入りした事が推測される。

古来、船の出入りが頻繁であった大阪でも、多くの漣標が河口に設置されていたとされ、漣標住吉神社も鎮座していた。現在、大阪市は漣標を市章としており、それと同様に細江町の町章も漣標であった。

遠い昔に都田川を中心に神聖なる文化圏が広がり、時に祭り事に際して銅鐸を船に乗せ、川上へ遡上する船の姿は何とも言えない光景だったと思う。この地は、漣標を見ながら古代に思いを馳せる事ができる魅力的な場所である。

〔所在地周辺〕 〒431-1305 静岡県浜松市北区細江町気賀 996 (細江神社)

(引佐細江水面＝みおつくし)

〔周辺の観光施設〕・気賀関所・姫街道と銅鐸の歴史資料館・陣座ヶ谷古墳
(角避比古神を祀る細江神社) (都田川河口にある漣標)



：井の国と天白磐座遺跡。

浜名湖北部の引佐細江に都田川が注いでいる。都田川の河口から約2 km上流の気賀で井伊谷川と合流し、井伊谷川の更に上流で分岐した神宮川沿いに、天白磐座遺跡がある。古代この地域を井の国と呼んでいたようである。

井の国とは一般的に水の豊富な地域を意味しているようで、この地域一帯は濃い緑の山々から緩やかな平地に向かって、一年中安定した水量の複数の川が流れている。遠い昔から人々が自然と共に豊かに生活を営んでいたことが容易に想像できる場所である。

天白磐座遺跡は古社である渭伊神社の北側の薬師山頂上にある。薬師山は三方を川で囲まれた標高約40 mの低い山で、頂上には多数の岩があり磐座全体を構成している。この地域一帯には多くの古墳が存在しており、古代、生活の為の治水は最も重要な事柄から、天白磐座遺跡は人々が末長く繁栄する事を願い、祈願した古代の祭祀場の様である。

現在でも磐座の巨石に手を当て、目を閉じると、頭上から何かが降りてくる気配を感じる魅力的な所である。

因みに井の国の井伊谷は徳川幕府の重臣であった井伊家代々の地である。その始祖である藤原共保は、浜名湖の瞳に位置する村櫛で育ち成人している。そして養父は当時、陸の孤島であったこの場所をなぜ選択したのか不思議である。

〔所在地周辺〕

〒431-2212 静岡県浜松市北区引佐町井伊谷 616-5 (浜松市地域遺産センター)

静岡県浜松市北区引佐町井伊谷 (渭伊神社・天白磐座遺跡)

〔周辺の観光施設〕・井伊谷宮・龍潭寺・竜ヶ岩洞・実相寺

(天白岩倉遺跡を囲む神宮川の支流)



(薬師山の頂上にある天白岩倉遺跡)



：内浦と曾許乃御立神社。

浜名湖北部の内浦の東に曾許乃御立（そこのみたち）神社がある。この神社は現在の茨城県にある鹿島神宮の祭神である武甕槌神（タケミカヅチ＝建御雷神）が、大和に向かう途中で根本山に立ち寄った際に造られた神社とされている。

その証か、曾許乃御立神社の祭神は鹿島神宮の祭神と同じであり、鹿島神宮と同様に境内に御手洗池があり、祭事として御船祭（みふねまつり）が行われている。祭神である武甕槌神（タケミカヅチ）は日本神話の中で出雲の大国主命から力により（諸説あり）国譲り迫ったとされる武神である。その国譲りで出雲に出かけたのは天鳥船（あめのとりふね）を使ったとされている。鹿島神宮も出雲大社も港近くにあり、曾許乃御立神社も浜名湖の内浦近くである。現代人が考える以上に、古代の人達の船の活用は盛んであったのかもしれない。

曾許乃御立神社から約 2 k m離れた北側に、神社と関係の深い根本山があり、山の麓は大規模古墳群になっている。曾許乃御立神社の社の参道は浜名湖の内浦の浜辺に向いており、古代、この地域一帯は、内浦の湾を活用した大きな文化圏が存在し、日本建国神話の国譲りや神武東征に深く関係したかもしれない。

特に不思議なのは出雲の国譲り神話に出てくる地名が、この周辺にある事である。国譲りを迫った“引佐の浜”、“礫岩”（島）、弁天島、そして出雲大社の建造地の杵築（きづき）は都築（つづき）と似ており、この地でも国譲りがあったのだろうか。まさに浜名湖ロマンである。

今も残る曾許乃御立神社の鎮守の杜には、力強く枝を伸ばした御神木がある。その下に立ち、当時、御立（みたち＝相手を敬って、その人の出発することをいう）というこの場所で気を新たにし、出発したのかもしれない。

〔所在地周辺〕 〒431-1209 静岡県浜松市西区舘山寺（内浦）

静岡県浜松市西区呉松町（曾許乃御立神社）

〔周辺の観光施設〕・舘山寺温泉・浜松動物園・浜松フラワーパーク・大草山（舘山寺のある内浦。中央が根本山） （曾許乃御立神社境内と御神木）



：弁天島と今切舞阪港。

弁天島や舞阪港は遠江と呼ばれた頃から現在まで、文献を見る限りこれほど地形が変わったところも珍しい。古代から現在まで、東西を行き来する旅人の舞阪一帯の印象は、その時代ごとの景観の違いにより異なったと思う。

それだけに、この地に立ち、遠くの景観を見るにあたり、地形というものは常に変わるものであり、その変化に挫けず前に進もうという気概が生まれるような土地柄である。現在、弁天島や舞阪一帯の発掘調査や海底遺跡の発見などから、弥生時代の生活道具等が見つかり、この地に於いて漁業生活を中心に人々が暮らしていたことが分かってきた。

舞阪の古社として岐佐（きさ）神社があるが、明応7年（1498年）の地震と津波により、社殿の一部が現在地に漂着した事により社殿を建てたとの事である。それ以前の岐佐神社が何処にあったかは現在も不明である。また、浜名湖の南部に今切が出現し、外海と繋がるようになったのもこの時である。

この天変地異により、弁天島や舞阪港の周辺は海に没したり、淡水湖であった浜名湖が海水と混じる汽水湖になったり、この地の住人は表現できない様な絶望的な驚きがあった事だと思う。

現在、舞阪港ではアサリやシラス漁等が営まれ、弁天島では観光的な活動が行われ、多少なりとも絶望感のあった時代とは異なっている。

この地には天変地異により地形が変わっても、逞しく進んでいこうとする力がみなぎっているようだ。弁天島や舞阪港を訪問し、地元の海産物を食し、不撓不屈の気力を付ける事が良いかもしれない。

〔所在地周辺〕 〒431-0214 静岡県浜松市西区舞阪町弁天島 3775-2

静岡県浜松市西区舞阪町舞阪（舞阪表浜公園）

〔周辺の観光施設〕・舞阪宿脇本陣・東海道松並木・弁天島海浜公園・渚園

（弁天島前の赤鳥居）



（今切口から入る舞阪港）

